

「インドネシア大学スプリングスクール参加報告書」

京都大学法学部4年 (氏名: 庄野裕貴)

①学習成果について

このプログラムに参加するに当たって、インドネシアの若者が伝統的な価値観を抱えつつも現在経済成長している自社会のことをどのように考えているかに関心を持って来た。今回のプログラムを通じて感じたことは、インドネシアの学生が持つ高い道徳心や思いやりの心は、パンチャシラ(インドネシア共和国の建国5原則のこと)やコーランという旧来の価値観を土台にしているということだ。一方で、新しいテクノロジーやポップカルチャーを積極的に受け入れており、それは女性のファッションにも見られ、日本の「カワイイ」服とうまく合わせたヒジャブのファッションを見ることもできた。本プログラムでポップカルチャーについて共同発表をするときもとても参考になった。インドネシアの人々がある種の軸を持ちつつ、多様性や新しいものに寛容であることが印象的だった。

②海外での経験について

SEND プログラムでは東南アジアの国々を中心に派遣がおこなわれているが、基本的にどの国も中学校・高校で習って来た英語は通じず、ある程度現地の言語を使ってコミュニケーションすることが要求される。そのような環境の中で日本の生活と比べて大変なことも多いが、自分が話せない、聞けない、読めない状態になることによって改めて日本で生活している他の国々の人々の気持ちを少しは理解できるようにもなると感じるし、そのような思いやりを抱くことこそが今後より多様化していく日本で暮らす市民に必要なことだと思う。特にインドネシアではインドネシア語が共通語としてあるものの、ほとんどの人の母語はインドネシア語ではなく、地方や民族によって異なる現地語であることが多いため、自分の母語が隣のクラスメートに必ずしも通じるとは限らない。そのため、インドネシアの学生は自分たちの民族の言語とインドネシア語、大学生なら英語を話し、日本語学科ならそれに付け加えて、日本語まで話す。私たちは教育のおかげで文字の読める状況が当たり前だと感じるが、そのように教育されない限り読めることはないし、社会にいる人々全員が自分と同じ言語を同じように理解することも限らないことに驚いた。

また私は英語の教職免許を取得予定のものとして、このプログラムを通じて言語教育の存在意義について考えさせられた。何故ならば、社会はAIによって翻訳や通訳の精度は年々向上しており、言語の翻訳に対する必要性が低くなっている。しかし、言語教育の目的とは、人と人との関係を作っていく上で、相手の言語を使うことで心理的な距離感が近くなることを感じ、その人々の文化についてより良い理解を得るといったことなのではないだろうか。

③プログラム内容について

今回の SEND では大きく分けて3つのプログラムを中心に活動を行っていた。(1) 午前のインドネシア語講座、(2) お昼からのインドネシア文化体験、(3) 夕方の日本学科の学生との共同プレゼンテーションである。(1) のインドネシア語学習に関しては今回が初めてだったが、授業の中で練習し、教室の外に出てすぐ使えるインドネシア語を学んだことが生活やフィールドワークをする際に役に立った。(2) の文化体験では通常の旅行では体験できないガムランなどを体験でき、楽しかった。(3) のフィールドワークでは JKT48 をテーマとし、フィールドワークとして実際の劇場を訪れ、インドネシアの人々がポップカルチャーやエンターテイメントについて何を求めているのかをインタビューできたことは有意義であった。その際に少しではあるがインドネシア語講座で学んだインドネシア語が通じたことも嬉しかった。

④進路への影響について

私は来年度から民間企業に就職する予定だが、東南アジアのシンガポールに世界本社があるので、今後ともインドネシアとの関わりは継続していくと思う。またこのプログラムを通じて出会うことのできた人たちと世界を面白くしていきたい。